



和字
信入

養生要集

北軒物語

上



天 保 再 板
 惠心僧都著述

年ろ
 法入

地獄
 六道
 極樂

往生要集

合於
 三冊

京都書林

西月堂
 又林堂
 書堂

梓

往生要集序

天右首權殿院の沙門
 源信と云と云ふ

それ。おん経く志やうに。もうあうとて。けて。
 成仏する。修行は。やると。た。う。た。う。へ。こ。ま。ふ。
 み。め。り。ハ。濁世未代乃の。ため。の。を。こ。へ。バ。
 目。ら。ま。て。と。お。ん。と。思。あ。ー。ら。ま。て。ゆ。く。が。こ。い。
 と。ー。か。く。わ。ま。か。う。さ。お。一。へ。ま。ま。ハ。倍。倍。男。女。
 へ。り。と。こ。こ。い。甲。ー。ま。も。智。り。ふ。と。お。ろ。り。
 あ。ま。と。法。の。こ。ろ。と。き。め。て。こ。れ。を。あ。り。

いづぎんや。たゞし。釈尊の教法その經
又びひろくする程の業因その修り又おや。
利根正智にして。くろくす。まきさ。ひ
いま。いづり。て。まみ。ら。せ。ん。ま。う。ご。と
く。あ。ら。な。は。こ。ま。ま。の。あ。ら。め。ご。た。り
ま。ま。り。ゆ。ら。な。ま。ま。り。ゆ。ら。ん。や。あ
は。な。念。仏。乃。一。門。に。お。り。ひ。よ。り。安。心。定。意。し。て
い。ま。り。修。悔。の。中。に。然。る。乃。又。と。あ。つ。の。書
け。り。ゆ。り。て。つ。の。り。と。ひ。く。ま。き。を。修

ま。り。ま。ま。り。や。ま。り。ゆ。ら。ん。ま。ま。り。
十。門。あり。考。と。二。門。よ。ま。け。る。一。つ。は。八。散。離
殊。去。二。つ。は。八。欣。來。淨。去。三。つ。は。八。極。ら。く。乃
淨。極。は。つ。は。八。正。修。念。仏。四。つ。は。八。助。念。の。法。方
六。つ。は。八。別。時。念。佛。七。つ。は。八。念。仏。乃。利。益。
八。つ。は。八。念。仏。の。陀。提。九。つ。は。八。生。生。此。法。業。
十。は。八。向。善。料。等。なり。こ。の。ま。ま。り。た。の。お
し。ゆ。り。て。ま。ま。り。ゆ。ら。ん。ゆ。ら。ん。
ゆ。ら。

目錄

獸雜律土寺

畢

上の巻

- 寺一 名所地獄の寺
- 寺二 玉繩地獄の寺
- 寺三 亢合地獄の寺
- 寺四 叫喚地獄の寺
- 寺五 大叫喚地獄の寺
- 寺六 焦熱地獄の寺
- 寺七 大焦熱地獄の寺

中の巻

- 寺八 阿鼻地獄の寺
- 寺一 餓鬼道乃寺
- 寺二 畜生道乃寺
- 寺三 修羅道乃寺
- 寺四 人道乃寺
- 寺五 天道乃寺
- 寺六 六道の狀おと結寺
- 寺一 聖元來迎楽の寺

下の巻

寺一 聖元來迎楽の寺

- 才二 蓮花初寤乐の事 寺
- 才三 方相神遊乐の事 寺
- 才四 五妙境界乐の事 寺
- 才五 快乐返返乐の事 寺
- 才六 三橋結縁乐の事 寺
- 才七 聖宮俱舍乐の事 寺
- 才八 見仏界は出の事 寺
- 才九 陸心住仏乐の事 寺
- 才十 瑞進仏道乐の事 寺

目錄終

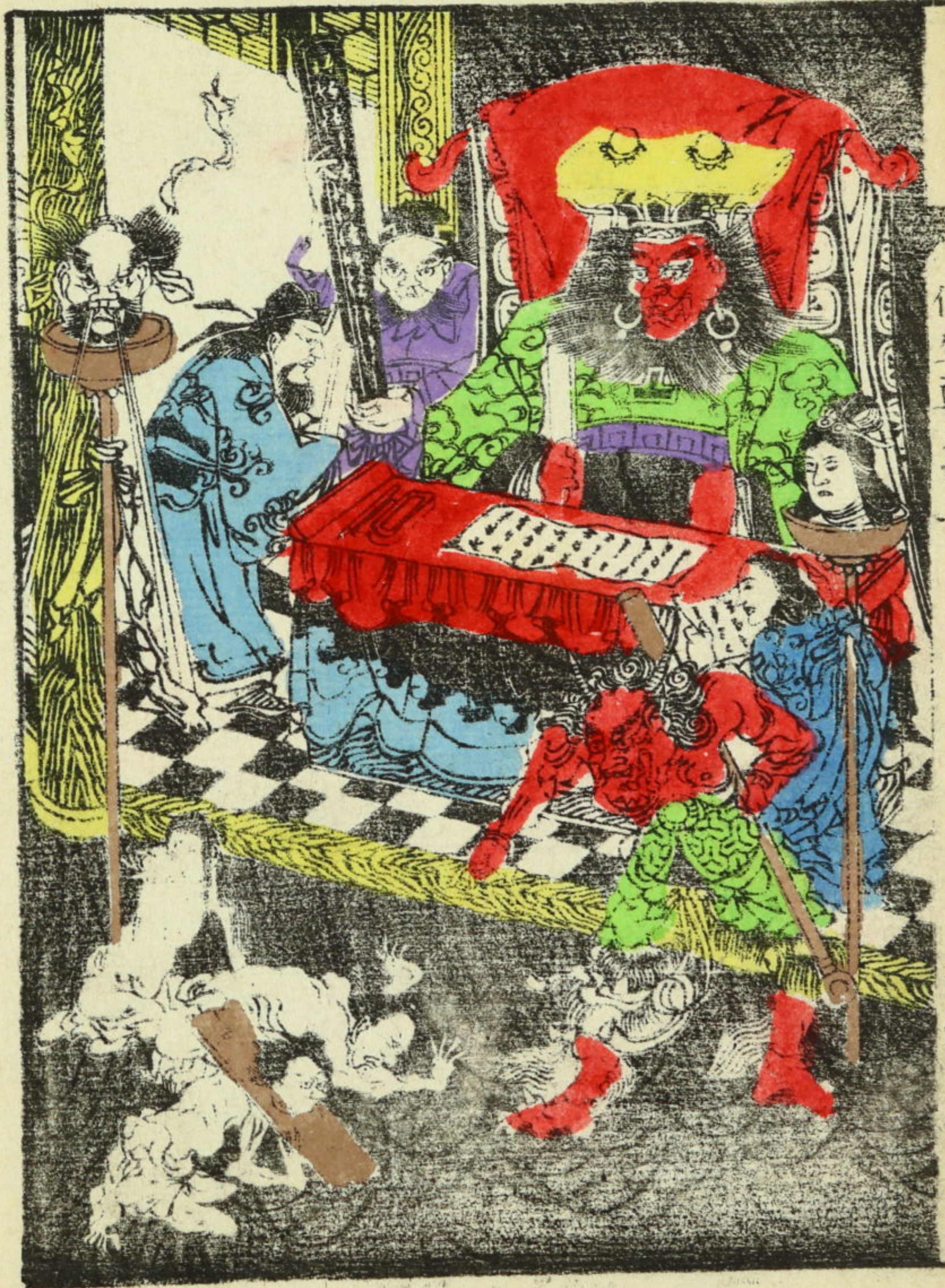
性理彙編卷之上

地獄物語上

は集い来りてあんなに傍觀をさひりしと、惡多き世を降ておろさん
 りつち中罪に似りしとて、又なる世の力に合道とも。善く
 讀やさんぬまとして、入るは善業の道、又ん傍觀するゆんや

大文 才一 賦離穢去の事

それとんりあどいひはげしうたさといひ離るるは、はははの世とて後
 六通よりく穢去を初てもと二界とあり。こゝに善きものか。世人の
 こととんりあどいひはげしうたさといひ離るるは、はははの世とて後
 考へ今それとんりの相とりすも、想して七捨りしとて、二界ハ穢去
 三ツハ善業は、阿修羅、又ハ人間、とて、人七ふハ物結り



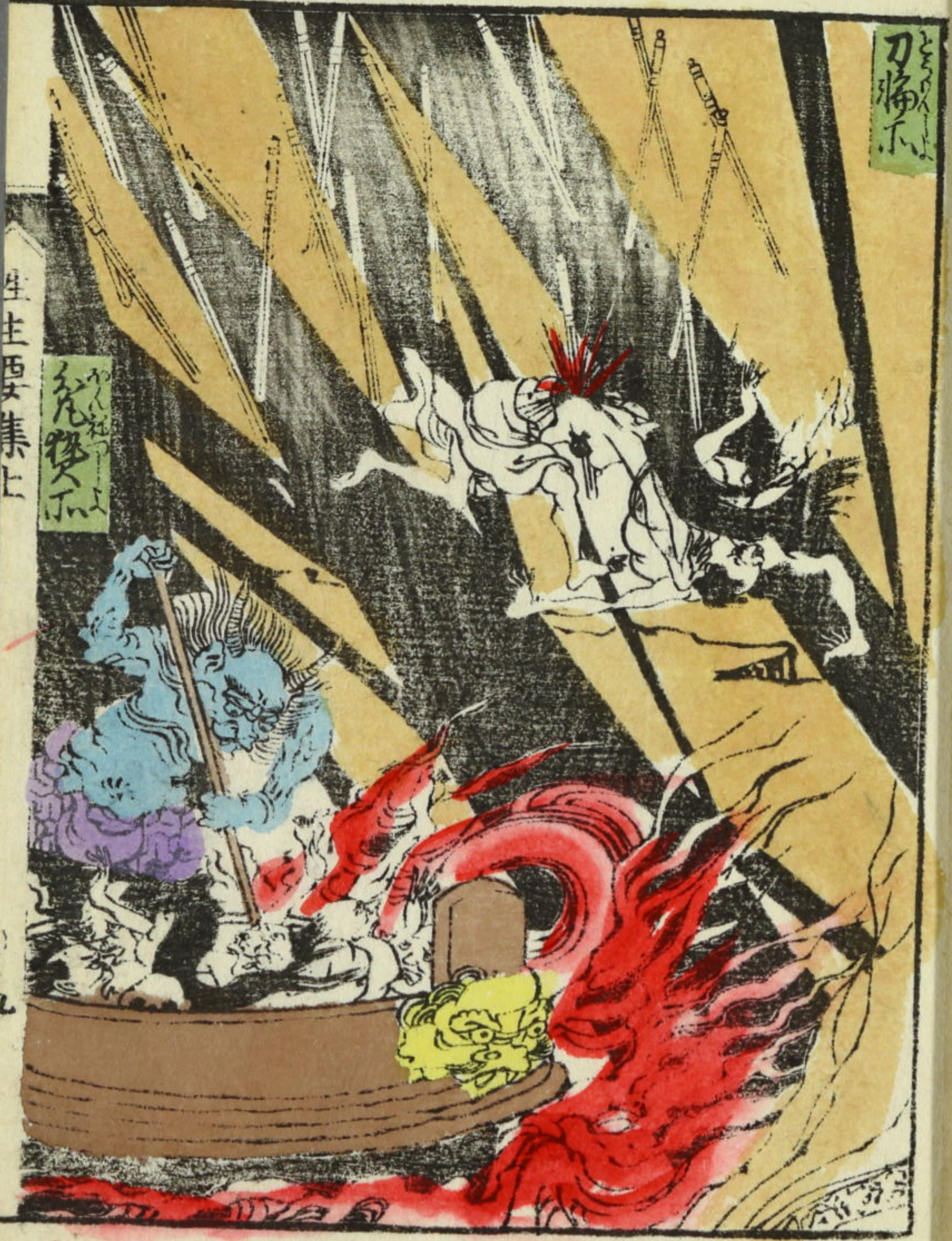
仙姑降魔



赤
尾
の
白
虎

催
生
要
集

六



住生要集上



不
疾
和

極
苦
不



大
苦
不

あ
ん
め
の
し
ん
が
い
ん

あ
ん
め
の
し
ん
が
い
ん



世に
西
集
上



赤
い
く
ま
の
こ
い

世に
西
集
上



五十四



五十五

五十六

御一を為しうらほむ。昔とて。事として。ことごとく。...

として曰。いんあ人の世として。いんあ人の世として。...



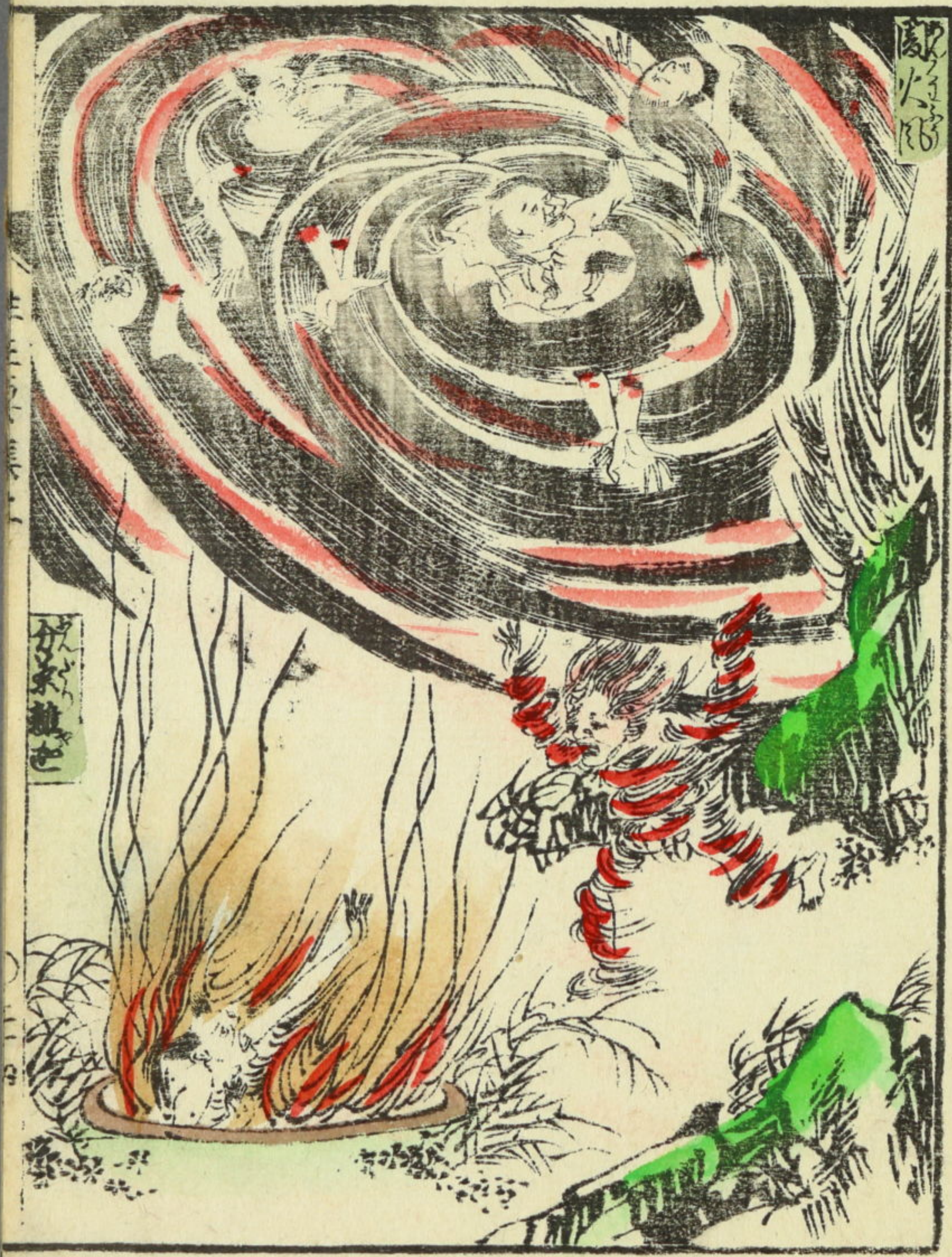


佐生要集

二十

乃人かたのたつらぢこのたつらぢのたつらぢかしてはなすのたつらぢとせうあつた
 りてはなすのたつらぢのたつらぢのたつらぢかしてはなすのたつらぢとせうあつた
 六子敷へ又他化自まのまののりてはなすのたつらぢとせうあつた
 六子敷へ教を体盗邪極飲海毒語邪九のまはぢぢとせうあつた
 是れ門のたつらぢ。又まのりてはなすのたつらぢとせうあつた
 飛人の一身のうらに芥子やまも火縮いゆえなるあつた
 かどのとくはなすのたつらぢとせうあつた
 離れの池あり。水首と飲つて。梅うらやる法あり。飛人ばとせうあつた
 へひて走り。都く不道の田の小元りて。へひて。元の中へ入る
 火をちて。乃百敷なることごとくはなすのたつらぢとせうあつた
 わりてはなすのたつらぢとせうあつた

小のりてはなすのたつらぢとせうあつた
 又他化自まのまののりてはなすのたつらぢとせうあつた
 又團火用とまのりてはなすのたつらぢとせうあつた
 よろしくとせうあつた
 かつらぢとせうあつた
 止とせうあつた
 とせうあつた
 大いかに火用りてはなすのたつらぢとせうあつた



あつたつてをきこ。ゆとるくとして。更のあ。とあるいん
や。は。実おの音と。陸湯は。大の。難食の。あ。元。東。西。野。の。事
と。あ。ん。や。凡。せ。ん。の。傍。借。す。ふ。び。も。あ。ひ。なる。も。さ。知。ん。ま。さ
れ。う。り。と。た。だ。ま。ま。も。美。は。と。あ。の。む。わ。と。あ。い。さん。し。げ。ん。り
と。あ。い。る。人。あり。も。も。れ。も。想。も。ま。の。の。こ。を。と。ひ。り。さ。る
と。い。ん。も。唯。口。平。乃。学。ま。た。ま。た。花。や。小。井。と。ま。い。み。み。か。う
向。上。に。ま。て。わ。く。涼。さ。び。く。の。つ。ら。る。ら。る。れ。ら。の。際。と。く。ん。む。い。ま
と。あ。い。の。い。じ。ぶ。と。よ。く。ま。あ。ん。ま。あ。ん。の。い。ん。あ。い。の。ま。あ。い
俗。の。間。と。だ。ま。さ。く。あ。い。の。か。ん。人。に。以。指。と。被。面。と。ま。い。り。の。あ。い。す
大。細。い。く。一。派。周。感。泉。の。け。う。う。ま。待。り。休。し。ぬ。く。あ。い。と。ぬ。れ
ま。の。ま。の。い。ん。ま。あ。い。の。ま。あ。い。の。ま。あ。い。の。ま。あ。い。の。ま。あ。い。の。ま

貧乏者持手... 邪見... 大七 大焦費地獄の事

〇七ツ小大せう持がごととまら焦費地獄の事いあらたきとすあ同じ
者のおこすま回く大なんよ たらああらの根本のぢらくんや新あ
地獄との一切のちのち若とすとらをのぼれたらうらうらうらうら
流うすま命令中初教生体盗取偽毒清邪見あび小法澤の戒
とたあらうのたけけけけのけけけけ小ねらるるのあ業九人ま
申あらいて大ぢいこのあのまよとらる小。獄身あらし。あ。う。う。う。う
すまま。ん。ん。ん。の。極。難。に。て。あ。い。の。の。区。眩。と。う。く。形。人。あ。れ。と
さて大にたむとる。先とまてあやあ。佛との。そ。あ。あ。利。刀



性生要集上



性生要集上

のえき計り^{とらひ}のしつじ^のすまのし^のまゝ^におのり^てけい^のひん^のた^ま
 り^のせき^をしる^べし^とし^たま^ふべ^し
 道^のた^まの^しつ^じ
 ば^らの^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ
 の^しつ^じ

阿鼻地獄の事

〇公乃りびぢごとくおのり^てけい^のひん^のた^ま
 欲^のせ^き
 〇七^つ
 〇八^つ
 〇九^つ
 〇十^つ
 〇十一^つ
 〇十二^つ
 〇十三^つ
 〇十四^つ
 〇十五^つ
 〇十六^つ
 〇十七^つ
 〇十八^つ
 〇十九^つ
 〇二十^つ

傳生要集



龍の吐く火



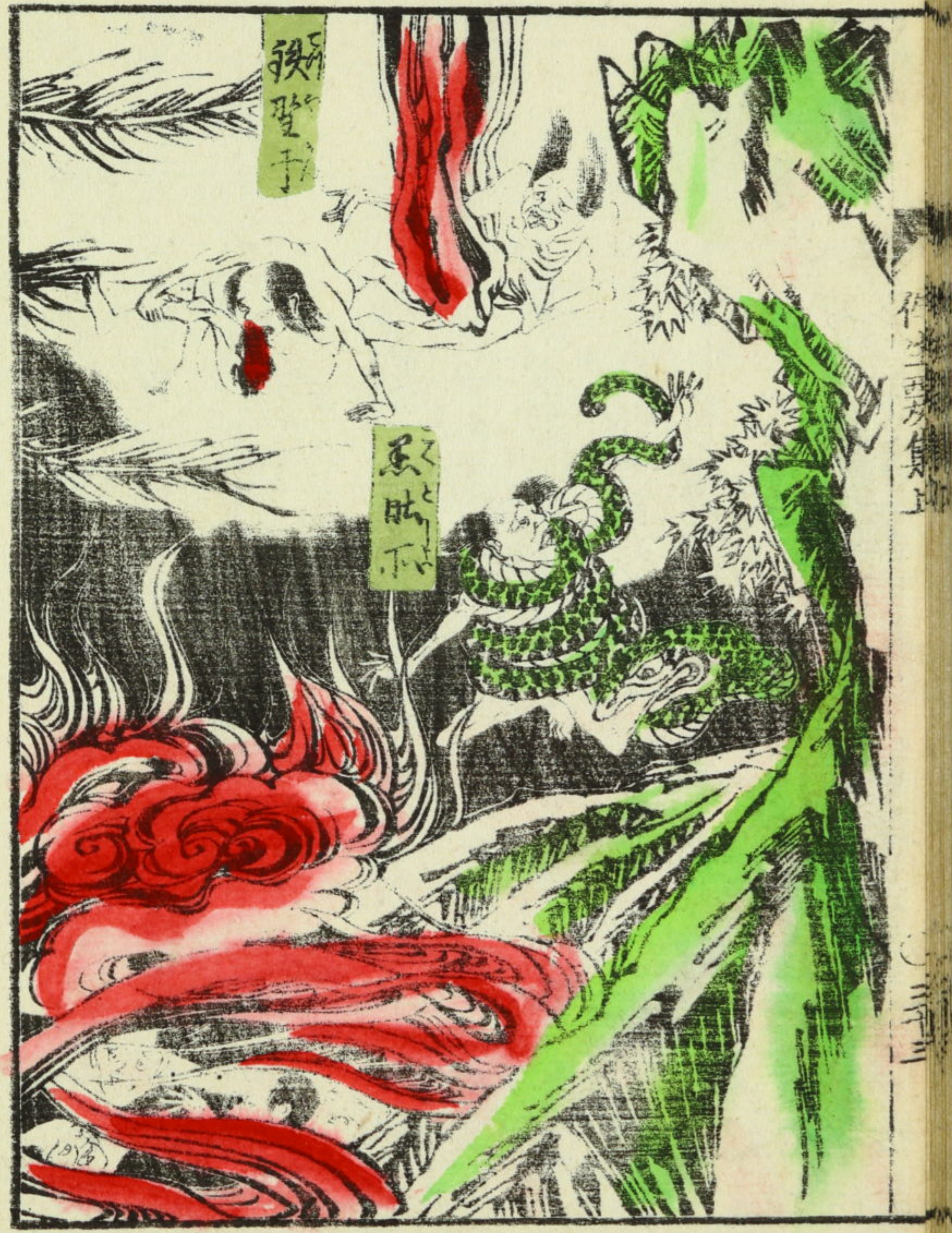
赤い真ん中の顔

佛生要集

二二九

ちごくふちらる。又柳下りの。黒吐下と名付る。仇かよるむなごころ
其力とて。さびしゆく。うらなひしとくさひ。 土まをさしききと
思ハ又生入り。又暗り。又吐乃黒く地なり。人の土まうひつ
先りの甲よりさる。ぬすくふさくさうり。けひハ種火ふく焼い
れ成ハ大さふたけを。れと成。れと煮。骨ちひみとこ
とま乃氷のどくせ。やり。又と火とさめハ種火とるるの
こよく種く。子孫の昔とつけて。種を佐藤と注にさる。れはし
伝乃賊物とり。ゆりて食さる。そのい中ハ。又阿部者
両山飛下と名付け。由由とろりろろのぶ。うらりて
飛人とおひ。さくくろふり。まん乃や。然りて。又生又とるぬ
又十一のち。ちておま。のくめり。せ。み力とやさる。又樹尊力とぶく

かうちとあま。のくきりてなせ。推尊乃がま。さる。又水。結とく。又
黒山病とい。黒山。やうの。さく。の。く。あ。い。信。某。と。ら。さ。り。は
む。種。父。伝。食。さ。り。て。も。の。く。な。せ。は。し。さ。り。あ。う。流。え。又。別。不。有
闇。安。彦。示。と。名。付。る。は。ち。と。ハ。闇。安。彦。の。名。を。り。ま。か。の。大。さ。る。尊
家の。と。く。尊。の。さ。り。て。し。て。又。お。の。け。出。る。飛。人。と。は。け。る。と。尊。を
さ。る。に。解。り。て。去。未。名。ま。ひ。お。の。け。さ。り。て。出。た。と。り。さ。り。の。あ。い
は。り。て。大。石。の。む。す。と。し。ま。力。神。と。あ。り。又。い。ひ。あ。そ。け。し。油
又。は。り。て。あ。り。る。尊。り。さ。る。の。く。ま。て。ま。ま。皇。勝。と。り。ま。じ。又。ま。の。園
に。る。物。ま。り。て。あ。り。さ。り。の。あ。い。さ。る。が。れ。あ。く。音。情。と。り。け。て。止。事。か
む。う。た。と。く。い。ひ。の。ぶ。う。い。ん。と。ま。ま。て。湯。灸。と。あ。り。ぬ。る。あ。の。この
ち。と。く。小。家。と。い。は。り。伊。生。の。く。し。く。こ。ま。ま。金。持。珍。伽。論。の。は。り。ま。い



市つらぬをむらりかんとせしむるも又どこの海にまぬひて居る
 と云ふ。是時一浪乃留のうら大爲着のうへは流あがり。らるひ八舟は
 あがりのたす目の玉とわらへてくらぶ。波の林のまじりしものもあつた
 つらむ。大さうな唐の川をせ。まじりたる氷にうまはるを中にならて
 びらり。あつたのむらむら。まじりたるものもあつた。かゝる
 まじりしものもあつた。大さうな唐の川をせ。まじりたる氷にうまはる
 じよとく焼て煮てをうらむる。海の上はあつた。まじりたるものもあつた
 ひも。あまのひもあつた。まじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 けりまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 絶大綱とらまへ川の青煙とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 塙が弁とらまへ川の青煙とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた

あるひ八綱とらまへ川の青煙とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 けては明とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 多。あまのひもあつた。まじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 多。あまのひもあつた。まじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 ありはて。絶とらまへ川の青煙とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 うらむ。あつたのむらむら。まじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 ろがりのたす目の玉とわらへてくらぶ。波の林のまじりしものもあつた
 絶大綱とらまへ川の青煙とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 塙が弁とらまへ川の青煙とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 一。あつたのむらむら。まじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた
 ほがりのたす目の玉とわらへてくらぶ。波の林のまじりしものもあつた
 〇月とらまへ川の青煙とまじりたるものもあつた。まじりたるものもあつた

